

和歌山大学協働教育センター クリエプロジェクト  
＜2018年度ミッション成果報告書＞

プロジェクト名：天野地域活性化プロジェクト

ミッション名：天野地域活性化プロジェクト

ミッションメンバー：システム工学部4年加藤史也、経済学部3年村木寛彩、経済学部3年木村青空、その他18名

キーワード：他大学連携、かつらぎ町天野、地域活性化、社会教育、生涯学習、

## 1. 背景と目的

3年前、教育学部で社会教育、生涯学習を学んでいた学生がその考えを多くの学生で実践的に学び、考えていきたいという思いから団体が設立し、かかわりのあったかつらぎ町天野地域をフィールドに活動を始めた。当時小学校統廃合問題を経て廃校になった小学校をどうにか町の交流の場として残していこうと地域全体で運動していたのがまさに天野地域で、そのような地域音団結力や課題解決に向かう姿勢から学生が学び、ともに考えることができると考えていた。

天野地域は自然豊かで深い歴史もあるが、生産人口に対する高齢者・年少者の割合が70%を超えており、超の付くほどの高齢化地域となっていた。そんな中で当初は地域活性化を掲げ学生が天野地域に入っていた。

目標としては地域で活動する意味を考えながら継続的活動を実施する中で地域と学生にどのような考えや関係性が生まれ、それが活動にどう生かされるのかを検証する。また、地域外から地域に入っていくものとして地域をどのようにとらえ、地域に何をフィードバックできるかも考えていく。さらに和歌山大学の4学部の学生だけでなく、信愛女子短期大学や和歌山県立医科大学の学生とも活動を共にすることで様々な側面から地域をとらえ、活動に生かしていけると考えている。

## 2. 活動内容

今年度は大きなフィールドワークとして天野地域への3度の宿泊訪問とかつらぎ町にて活動報告会を実施した。

まず6月に天野地域の振興活動をされている天野の里づくりの会が毎年実施しているホテル観賞会への参加をメインに訪れた。今回の目標はホテル観賞や天野の里づくりの会の堅い地域を案内していただくことによって天野地域の自然や歴史、地域の人々を知り、魅力をフィードバックするというものだった。学生は付箋とペンを持ち、天野の里づくりの会の方の説明をメモし、情報交換を行った。初日の夜には地域の方々に集まっていたいただき懇親会を行った。学生の相談に乗ってくださる方や、地域の方が思う天野地域世良さを語ってくださる方など、学生と地域が深く交流できた時間だった。

また、初日の天野地域めぐりとホテル観賞を終えた次の日、天野地域の子供たちに集ってもらい、学生の考えた遊びで子供たちとの距離を縮めた。そこでは子供たちの前で話し、取りまとめることがとても大変だった。話しをじっと座って聞けない子がいる中、子供たち

のお母さんたちからアドバイスをもらいながら教えてもらいながら子供と触れ合った。



次に8月に例年天野地域の子供を持つ親御さんで構成された育成会という組織が実施している子供会キャンプに参画していった。ということで今回は地域行事への参画と地域との協働を目標にした。昨年度も子供会キャンプに参加したのだが、昨年度の活動報告会の時に地域の方々から「次年度は当日に参加するだけでなく事前の計画段階からかかわるような参画をしてほしい」との声を上げてくださったため、今年度は事前にテレビ電話やメールを用いて天野地域の子供たちとも遠隔で打ち合わせを行った。活動日当日、台風の影響もあり活動内容の変更があったが6月の活動で子供たちとの信頼関係も深まっており、順調にかつどうが行えた。今回、夏の自由研究としての実験を実施したのだが、学生と子供たちが少人数のチームとなって活動を行ったため、チームごとの役割分担や、チーム内での深い交流が実現した。さらに親御さんのほうからもちょっとした仕組みづくりではあったが称賛をいただいた。



11月には秋祭りと呼んでフィールドワークを実施した。8月に実施できなかった子供たちとの肝試しや地域のお母さん方から要望いただいた年末の子供たちの出展作品の協力をプログラムに加え、学生の自然豊かな天野地域でやってみたかった落ち葉での焼き芋や地域内を散策しながらなぞ解きをするウォークラリーを子供たち中心に地域の方々に協力してもらいながら行った。今回の目標は地域の子供たちとともに天野地域への関心を高め、守っていききたい天野の魅力を発見することだった。天野地域が持続可能な地域になるための重要なポイントの一つに地域で生まれ育った子供たちがまたその地域に帰ってくることを考えており、そのために子供たちと一緒に天野地域への関心を深めようと考えた。これまで天野地域を訪れて地域を知る活動をしてきた経験からウォークラリーという形式で子供と学生が少数のチームになり実際に地域を回りながら関心を深めていった。また、チェックポイントに地域の方に立っていただき、そこで天野の歴史や文化についてお話しいただいた。信愛女子短期大学の学生は年末に子供たちが出展する工作の担当をし、保育科ならではの視点と話し方で活動を盛り上げた。翌日落ち葉を学生たちで拾い集め、地域の方々を呼んで焼き芋を行った。さらにその後少し時間が余ったので地域の方が運営しているバラ農園の視察も行った。



最後は年が明けた2月にかつらぎ町総合文化会館の部屋を借りて今年度の活動の報告会を天野地域の方向けに実施した。目標は今年度の活動の振り返りと成果のフィードバックすることとした。実施内容は活動報告プレゼンと各活動のポスターセッション、これまでの活動からちいきと学生に何が生まれたのかを討議するパネルディスカッションであった。活動報告プレゼンでは天野地域で実施した活動以外にユネスコ青年部として太地町や串本町に調査しに行った話をした。ポスターセッションでは各活動ごとにブースを設け、地域の方々に各ブースに移動していただき会話や意見交換をしながら学生個人の感想を踏まえで報告させていただいた。

そこから来年度以降実施したくなるような話題や新たな発見なども生まれた。そしてパネルディスカッションでは今年で和歌山大学生で活動3年目の学生、初年度の学生、信愛女子短期大学の学生の3名と顧問の教授、天野の里づくりの会の会長様系5名が登壇してくださり様々な視点から活動をとらえる場となった。



### 3. 活動の成果や学んだこと

今年度は子供たちとかかわる活動が多く親御さんたちから「自分の子供が学生たちと楽しそうに遊んでいる姿を見るのが一番幸せで、私たちにとっては地域活性化してもらえている」と言っていたことがとても印象に残っている。和歌山大学生と和歌山県立医科大学生は普段は子供と接する機会が少なく、活動中子供たちの前で話すときも必死に伝えようとしていたが子供たちは途中から話が耳に入っていない様子でとても悩んでいたがそんな時お母さん方や信愛女子短期大学の保育科のメンバーの子供との接し方から学ばせてもらうことが多かった。特に“〇〇をしてください”というような語りかけではなく、“何秒以内に〇〇できるかなー？”というような子供たちが動きたくなるような工夫や、演劇をするような大げさな身振り、口調を使ってみることも実践から学びにつながった。

宿泊のフィールドワークで毎晩開催していた懇親会ですが、天野地域のある方が「わかまなび（自団体の名前）のファン第一号として、、、」というように話して下さったこともとても印象的で、天野地域が“学生のふるさと”のような存在となってきている。また、別の懇親会でバラ農園をされている地域の方の話を聞いていた学生たちが天野地域でバラを育てていると聞いて興味を示したところ早速翌日訪問するというような話になった。このように地域とかかわる中で突発的に新しい活動が生まれたり、企画が進んだりするところも地域におもむいて活動をする醍醐味である。

### 4. 今後の展開

今年度、地域の子供たちと実際に地域を回って地域の魅力を共有した。来年度は地域の将来を担う子供たちにスポットを当てた活動を考えている。具体的にはほかの地域と比較した天野地域の魅力を一緒に探すなど、地域外からの学びや、新たなメンバーを加えた活動を展開していきたい。

問題点や課題点としては事務作業がしっかりと分業できず支援していただいているにもかかわらず提出期限が遅れたり不備があることが多かったため、団体のルール作りや体制といった組織化をしっかりと図っていききたい。そのために定期的な幹部の集会とうを実施していく。

活動の面でいえば、他大学との連携の点で分業がうまくできていなかったのでコミュニケーションを図っていく。

### 5. まとめ

学生が地域に入っていく、地域を巻き込んだ活動を展開していくことで地の人気づかなかった魅力を風の人となって伝えることができ地域の年配と子供たちのような普段かかわりの薄い関係性の接着剤となれると考える。

また、今年度活動を終えて天野地域でこれまで活動を実施してきた意味が再認識できた。学生は天野地域がこれまで守り続けてきた自然や歴史、文化から様々な刺激を受け、子供たちとのかかわりから互いの成長を促している。さらに天野地域の方々には学生に対して固い教育観をもっていないため互いに使命感のないそれでもかかわり続けたいと思わせるのだと感じた。